

戦後混乱期における福祉施設の運営とララ救援物資

— Aランク県に残る記録から —

○ 常磐大学 西田恵子 (001970)

キーワード：ララ物資、社会福祉施設、民間社会事業、戦災孤児

1. 研究目的

第2次世界大戦後、疲弊した日本への支援として送られたララ救援物資の意義について社会福祉の領域で明らかにすることが研究全体の目的である。本報告はその一部をなす。

ララ救援物資は、第2次世界大戦後、戦災国である日本の救援を物資を介して行ったアメリカの民間団体 **Licensed Agencies for Relief in Asia** (アジア救援公認団体、通称 **LARA**、以下「**LARA**」という。) が送ったものである。

既存の様々な社会システムが崩壊した戦後混乱期には膨大な戦災者がおり、救済を要する層は飛躍的に増大していた。しかし社会福祉の諸制度は未整備であり、公的な保障もいきわたらない状況が続いていた。そこへの海外からの救援であった。

LARA 救援物資が積まれた第一船が日本へ着いたのは1946年11月である。1952年6月に終了するまで計458船、食糧・衣服・医薬品・靴・石鹼・布地・綿など総量約3,300万ポンド(約15,000トン)、当時の金額にして1,100万ドル(邦貨で400億円)に相当する救援物資が届いた。

GHQの指導と、ララ中央委員会と厚生省との調整の中、公平性、効果性、迅速性を重視して配分はなされたが、「厚生省は救援物資が闇市場に流れる危険を少なくするため、ほとんどの物資の分配・流通を福祉施設にとどめ」(多々良：1999：170頁)た。児童施設、老人収容施設、結核・癩治療施設をはじめ、ミルク・ステーション、戦災者引揚寮、病院など、対象となった施設の数は約5,500にのぼった。

当時、利用者の食糧・日用生活品、起居の場の確保、財源の調達等は、各施設の努力に委ねられていたとあって過言ではなかった。施設の支えを必要とする層が拡大する一方、運営環境は悪化を辿るという危機に瀕した事態において、**LARA** による救援は多くの意義をもったと考えられる。そこでララ救援物資の配分を受けていた施設の運営実態から、**LARA** 及びララ救援物資の意義を抽出したい。

2. 研究の視点および方法

社会福祉領域でのララ救援物資の研究は多くない。ララ救援物資の配分終了を機に厚生省がまとめた『ララ記念誌』(1952年)と、多々良紀夫が著した『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』(1999年)の2点が主たるものである。これらから把握できる事柄を貴重な情報として扱いながら、新たに収集した資料から把握できた事柄を生かし、分析する。

本研究では戦災地における困窮とそれに対する支援のマッチングに関心を払い、(1)ララ救援物資の配分実態の把握、(2)施設の運営実態の把握、(3)施設利用者のララ救援物資の使用実態の把握、を行う。分析にあたっては、被害の大きかった地域を優先するとともに、

次代を担う役割を負いながら多くの困難にさらされていた児童に焦点をあてる。

3. 倫理的配慮

文献、資料の引用にあたっては出典を明らかにし原典主義を貫いている。また、研究の過程で証言を得る際には、協力者の名誉やプライバシー等の人権を侵害することがないように十分な配慮を行うとともに、把握の内容については本人による確認と承諾を行っている。

4. 研究結果

救援物資の配分にあたってララ中央委員会は戦争被害数によって都道府県を4グループに分けた。もっとも被害が大きいのがA、次いでB、C、Dの順となる。Aグループにランク付けされたのは東京都、神奈川県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、広島県、長崎県であった(多々良：1999：170 - 171頁)。

このうち広島県に注目すると、救援物資の食糧 25,145,248.085lbs、衣料 5,509,313p'cs、原反 503,563,265yds、靴 397,695p'rs、石鹼 320,353lbs、原綿 47,761,804貫、薬品 1,491,057p'cs 他であったうち、1,552施設、267,138人に対して、食糧 398,819.lbs、衣料 168,565p'cs、原反 7,816.75yds、靴 11,460p'rs、石鹼 4,235lbs、原綿 671.8貫、薬品 387.472p'cs 他が配分された(厚生省：1952：84-87頁)。

施設は既述の通り複数種に渡る。原爆投下直後、そして戦争終了時、広島の子供孤児等要保護児童の数は(現)児童養護施設では対応できないものであった。その状況に立ち会った人々の中から、新たな民間社会事業家が生まれた。苦心の中で仮住まいを設け、子ども達に食糧を確保し、医療を受けさせる等し、施設が運営された。各施設の設立時の状況をみると、特に投入する資産に恵まれていたわけではなかった。子どもの保護、養育を継続するにあたっては、家族の負担、協力者の負担は少なくなかった。

そこに配分されたララ救援物資について、いくつかの記録から把握できることがある。1947年10月22日に発足した広島新生学園の場合、施設の運営と経営に邁進することが優先され、設立から45年を経てようやく記念誌が編集発行された。記念誌は当時の利用者・子ども、ボランティア、職員の寄稿によって構成されている。そこには、「年に一度、ララの贈り物とかいって米国から食糧品のミルク、メリケン粉や古着、靴などが大きな箱に入れて送られてきました。一人ずつブラウス・スカート・ドレスを当ててもらった日はとても嬉しい日でした。ほとんどの靴は大きくてはけませんでしたが、服は色とりどり、デザインも変わっていて珍しい物がありました」(19頁)、「私達はいつも腹をすかせていて、銀シャリが食べたい、何でもいい腹いっぱい食いたい食べたい。ララ物資のコンビーフの美味かったこと。こんな上等なものをアメリカ人は食べて、日本人は藪や薄い雑炊をすすっている。勝者と敗者。日本は父母きょうだいを殺して本当に敗けたのだと少年の実感として思いました」(22頁)という記述がある。45年の時間を経てなお明確な記憶と思いが残る事柄であったことがわかる。

施設の運営者達においても、世代間で伝承がなされている施設がある一方、特に伝承がなされているわけではない施設も相当にあることが把握された。

5. 考察

日本の戦後、絶対的な困窮状態にあった子ども達を支援する民間社会事業家達は多くの負担をもって施設運営を継続させていた。そこに届いたララ救援物資は、日常の運営に十分なものではなくても、記憶される事柄として意義をもっていた。